

「月へ行きたいんだ。おれ、リスからヒッチハイクしてきたんだよ」

「おやおや。長かったろうな。何という船に乗っているんだね？」

「知らない。そううまくターミナルでただ乗りできると思うかい？ 貨物船の発着場をあたってみる方がよさそうだな」

「なるほど、ただ乗りするつもりならね。だけど、アルフレッドがやってこなかったら、きみが彼の旅券を使っても多分かまわないだろうな。やっこさんはもう二隻も船に乗り損なっているからね。だいたい自分でもどうして彼を待ってここで立ち往生しているのかわからんよ。わたしたちがいっしょに行く計画を立てたということ以外には」

「月へかい？」

「その通り」

「そりゃあ、しめた」ジョーが顔を輝かせていった。「彼がこなければいいんだが——」

彼はいいよんだ。「これはシンプレックスな考え方だよね？」

「真実はいつでもマルチプレックスだよ」とオズカーがいった。

「そう。彼女もそうだった」

「昼間きみといった御婦人のことかね？」

ジョーは頷いた。

「ところで、彼女は誰なのかね？」

「サン・セヴェリナだよ」

「その名前は聞いたことがあるな。銀河系のこんな渦状肢で彼女は何をしているのかね？」

「ルルを少し買ったんだよ。彼女にはしなくちゃいけない仕事があったから」

「ルルを買ったって、ええ？ ところが彼女はきみに旅券代としてびた一文渡さなかったというのかね？ 月旅行料金の百五十クレジットぐらいはどうにでも融通できると誰しも思うのに」

「いや、彼女はとても気前のいい人だよ」とジョー。「それに彼女はルルを買ったんだから、彼女のことを悪くするのはいけないんだ。彼らを所有することは、とてもとても悲しいことなんだから」

「わたしがルルを買えるほどの金を持っていたとしても」とオズカー。「どうということはない、そう、何もわたしを悲しませはしない。ルルを少しだって？ いったい彼女は何匹買ったんだね？」

「七匹さ」

オズカーが額に手をあてて、ヒューと口笛を鳴らした。「しかもその値段は等比級数的に増加する！ 二匹買うには、一匹を買う四倍の金がかかるのは知ってるだろう。それでも彼女はびた一文くれなかったんだね？」